

（思想史）
アビ・ヴァールブルクの「ムネモジユネ・アトラス」に関する解説書を共著でようやく上梓できたこともあり（ありな書房刊）、この異様な記憶装置が作り出す磁場をつねに感

ら出発した自由な解釈という実験の産物として、27に及ぶ「仮説」の数々を収めている。言語と画像の中間に位置するダイアグラムへの関心は近年非常に高まっているように見える。「書写的図像性」を主題とするE&S

れ使われた、イメージ記憶の探索の「フィールドノート」だったように思われる。

斎藤成也

（人類学）

- 1 筒井清忠『昭和戦前期の政党政治——大政党制はなぜ挫折したのか』ちくま新書、二〇一二年
- 2 富坂聰『チャイニーズ・バズル——地方から読み解く中国・習近平体制』ウエッジ、二〇一二年
- 3 マーティン・ファンクラー『「本当のこと」を伝えない日本の新聞』双葉新書、二〇一二年
- 4 中川裕『アイヌ語のむこうに広がる世界』編集グループSURRE、二〇一〇年
- 5 日経アーキテクチュア編『建築家シリーズ 伊東豊雄』日経BP出版センター、二〇一〇年

3 十年以上にわたり日本で報道にたずさわってきた著者の痛烈な指摘が随所にある。南三陸町長の心理を汲むことを考えもせず数字ばかり質問する日本人の新聞記者と著者のした質問「津波が来た当時どこにいましたか」との巨大な落差。記者クラブという巢窟。まあ、日本人記者にもまともな人はいますがね。

4 アイヌ語の専門家と六名による座談会形式。含蓄のある指摘がふんだんに盛り込まれている。アイヌ語と日本語の関係についても考えさせられた。アイヌ語カラオケというアイデアもおもしろい。ことばが文化の中核にあるという当たり前のことを痛感した書。

5 伊東豊雄さんの後輩で建築学科にいる娘の本を借りてスペインへ持ってゆき、セビリア市のアルカサルで西日財団賞を受賞された彼にサインしていただいた。広大かつ軽みのある建築作品がずらり。建築が社会の中で持つ迫力を感じた。仙台のメディアアートをぜひとも見学したい。

柿沼敏江

（音楽学）

- 1 安田登『異界を旅する能——ワキという存在』ちくま文庫、二〇一一年
- 二〇代後半になってはじめて謡の稽古を始め、シテではなくあえてワキとなった異色の能楽師による能楽論。ワキは脇役ではないと

言い、ワキから能楽を見たこの本からは、能という芸能がじつに生き生きと立ち現れてくる。漂泊の旅をする僧侶はワキの代表的な存在である。旅するワキが異界と出会うのはなぜか、なぜ異界との出会いによって生き直せるのか。芭蕉、ワグナー、夏目漱石、老子、莊子など豊富な知識を練り出しながらの記述はたいへん面白く、能楽が身近なものになった。

2 バリー・バーンズ『グレートフルデッドのビジネス・レックス』伊藤富雄訳、翔泳社、二〇一二年

グレートフルデッドというロックバンドについては、カリフォルニアに留学しているとき知った。ヒッピー・ムーヴメントに重要な位置を占めるバンドであり、また様々な文化的貢献をしていることは後に知ることになった。本書はその伝説的なロックバンドの戦略がビジネス・モデルとして有効であると論じる。たとえばこのバンドのライブではオーディエンスの録音が許されている。そうした無謀ともいえるやり方でどうしてビジネスが成り立つのか、その賢い経営術が詳細に解き明かされている。

3 吉見俊哉『アメリカの越え方——和子・俊輔・良行の抵抗と越境』弘文堂、二〇一二年

日本の敗戦によって、日本の帝国主義は冷